

昼寝して聞く田植唄

木 枝 燦

卒業生の皆さん、ご卒業まことにおめでとうございます。皆さんはこれから同志社大学、あるいは同志社女子大学に別れを告げて社会に出て行かれます。嬉しいという気持と、何となく名残り惜しいという気持が交錯していることでしょう。これから新しい場所で未知の仕事を始めるという緊張感と、比較的自由でのん気であった大学生活への郷愁が、もう既に皆さんの胸中では渦巻いているかも知れません。

学校を離れてみると、そこで学んだもろもの事柄がすぐ役に立つとは限りません。大学は昔のように登竜門ではありませんでした。いや、明治時代はいざ知らず、戦前の旧制大学とても必ずしも登竜門ではありませんでした。大学の卒業証書は、所定の単位を取得して学士の称号を得たことを証明するだけで、将来を保証する何ものでもありません。実は何も証明していないと言うべきでしょう。極端かも知れませんが、およそ証明することができるのは数学の世界においてだけではない

かと思えます。精密科学である物理学においてさえ、一步踏みこめば証明はできず、極めて客観性の強い説明をしているだけであります。例えばある科目の単位を取得したといっても、担当者が複数の場合は採点のレベルが違うかも知れず、また他大学のその科目、外国の大学においての同じ科目でも、同じように単位が取れるかどうかは甚だ疑わしく、客観性はありません。客観性がないのに証明とは本来言えない筈です。ですから卒業とは常識的な意味しかありえないのです。その事は既に大学生活を終えた皆さんはよくご存知の筈です。

それでは卒業はなぜめでたいのでしょうか。まさか、あの人は「おめでたい」という時のめでたいではないでしょう。共に喜びを祝うという意味のめでたいに違いありません。そこで思い出すのは三十数年前、工学部が最初の卒業生を出そうとする時のことです。敗戦後の苦しい時代でしたが、四年次生の一人の学生をつれて就職のお願いにあちこちの会社を廻ったことがあります。しかるべき会社で人事担当者は異口同音に「へえー、同志社に工学部があるのですか、それは知りませんでした。折角ですが」と話に乗っては貰えませんでした。いろいろ社名を調べてまたある日、その学生とある会社に行きました。尋ねあぐねた末にたどりついたその会社の本の門は夕陽の中に斜めに傾いていて、社名を記した標札が門柱からずれて地球の重心の方へ垂れ下がっていました。その前でしばらく二人で立っておりましたが、さすがにその学生も、「先生、折角ですが今日はもう帰りましょう」と申しました。このような時代においても卒業はめでたく、卒業生諸君もわれわれも共に卒業を喜び祝ったのです。

米国では卒業式のことを commencement と申します。開始する、始めるという意味に由来しますが、大学の学業を終えて一人前の職業人の資格をもって社会での仕事を始めるといふことです。

日本では終えるという所に力点がありますが、米国では始めるといふ点を強調するのでしょうか。ドイツでは卒業を *Abgang* といい、これも出発を意味しますから、米国でと同じように巢立つといふ考え方です。確かに学業を「終えた」といふことは立派なことで、めでたいと言って祝うに値することではありますが、真に大切なことは皆さんが同志社の卒業生として世の中へ「出発」し、それぞれに仕事を始めることであり、そのことはまた、皆さんが個人としてと同時に、同志社卒業生として世間から試験を課され、力量を問われるということの意味します。

これは丁度播かれた種が芽を出すのとよく似ていて、これから大きく育てていくという点で「芽出」たいのであって、立派に実ったものを収穫したお祝いではありません。先に述べた創設期の工学部においても皆が卒業をめだいたしたのは、たとえ有名な会社に就職できなくても、これら世の中に出発するという盛んな意気込みがあったからであります。当時は教育のレベルも低かったと思いますし、実験設備などは今では恥ずかしくて口にできぬ程貧弱でした。生活に苦しい頃でしたから生きるためのアルバイトも必死の思いでしなければなりません。しかし、当時の卒業生は現在それぞれ重要で立派な働きをしております。

最も大切なのは社会に出てからのこの働きであります。働くことは人偏に動くと言ふ通り人が動くのですが、関西では「はたらく」を「傍はたの人が楽らくをする」ように仕事をするのだと申します。これはもちろんこじつけで、しかも他人のために仕事をするということは形式的な合理主義とは矛盾する面もあるでしょう。しかしわが国の庶民の伝統的な考え方の大切な一面を物語っております。学校の成績や学士の称号よりも、同志社卒業生としての皆さんのこれからの社会的責任を背負った働きこそが重要なのです。

ここで話を變えて俳人小林一茶のことを考えてみましょう。十四才で彼は越後柏原かしはらの生家を追われ江戸に行ったのですが、帰郷するまで四十年近い間の生活はよく分からないようです。毎日毎日句作に専念して生涯一万八千句の作品を残しておりますが、一人の人間として俳句によって自らを表現するよりほかに生き方を知らなかったと言うべきでしょう。このような生き方は一体他人のために役立っているのでしょうか。

彼の作に、

耕たがやきずして喰くひ、織おらずして着てる体たらく、今まで罰のあたらぬもふしぎなり

田植　もたいなや晝寝して聞き田うへ唄

というのがあります。一茶のひたむきな句作を顧みるとき、これは自嘲ではなくて辛い労働をする人々に対して心底から申し訳ないと思う心がにじみ出ていると思えます。たださりげなくありのままの自分を表現したものでしょうが、実にやさしく慰められ生きる力を与えてくれると感じられます。

誰も彼も一茶のように放浪して句作に没頭するような生活を送ることはできませんし、また望ましいことでもありません。皆さんはやはり社会の中でそれぞれ責任を負い労を惜しまず働くという姿勢を保つべきですが、行き詰まったとき、その姿勢を變えることなく、しかし気持の上にしぼしの間の余裕をもつために、一茶のこの句を序の言葉と共に思い出して頂ければと思えます。

気韻生動して風光る三月、皆さんが社会に巣立って行かれる今、心からご多幸を祈り、もう一度ご卒業おめでとんと申しあげます。

(同志社総長代行・同志社大学長)

人間と科学

岡野久二

今春も同志社で学んだ数多くの卒業生を実社会へ送り出す季節が訪れました。今年卒業してゆく人々が、十五年後にやってくる二十一世紀の担い手になることは確実ですが、その来るべき未来がどのような時代であるかを今から想像することは極めて困難であります。しかし、アメリカの政治家、パトリック・ヘンリー（一七三六―九九）が「過去による以外に、未来を判断する方法を私は知らない」と、いみじくも言っているように、現在を過去の結果と考えると、現在が原因となる未来を展望することが可能でありましょう。

私たちはこれから二十世紀の「世紀末」を迎え、同時に二十一世紀を指向する時代に入ってゆくことは間違いありません。「世紀末」と言うと、十五世紀末はデカダンの享楽主義、懷疑主義などが、フランスを中心にして、文学、芸術の主流をなしていました。その背後には資本主義社会の行き詰まりに対する危機感が根強く存在していたのでありますが、その頃の風潮からは、二十世紀に

對する明るい展望を期待することはできませんでした。ところが、二十世紀に入ってみると、二度に渡る世界戦争（一九一四―一八、一九三九―四五）や数多くの局地戦争が世界各地で行なわれましたが、「この世の終り」を迎えることはありませんでした。経済的にも一九二〇年代の大不況を経験しましたが、現在も、過去にその例を見ないような高度の経済成長に支えられて、生活水準は向上し、豊かな物質文明の中で、人間の寿命は驚異的に延長し、十九世紀よりはるかに分厚れた時代を享受しています。そして、次に迎えようとしている二十世紀の「世紀末」には、米ソ兩陣営における巨大な核兵器保有という緊迫した状況があるにもかかわらず、ベシズムやデカダンの思想が支配的になる気配は見られません。核戦争や、現在アフリカを襲っているような食糧危機の重大さが予言されていますが、その底流にある雰囲気は明るく、健康的であり、デカダンのものではありません。それを推進しているのは二十一世紀へ向けての期待感であり、その中心をなしているのは科学技術のより一層の発展であります。言葉を変えれば、今世紀は「科学の世紀」、「技術の世紀」であり、それは知識の異常とも言うべき急成長を物語っており、その知識は驚く程の速さで「新陳代謝」をしています。昨日の知識は、今日は役に立たなくなっているか、大した価値を持たなくなるか、または、ほとんど顧みられなくなっているのが実状であります。あまりに急激な知識の進歩が全てを忽ち遠い過去へと押しやってしまうのです。この傾向は、来るべき二十一世紀には更に強化されることが予想されます。

十九世紀のアメリカの文人、ヘンリー・デビッド・ソローが、「人間は今や自分が用いている道具の道具になってしまった」と嘆いた状態が、より先鋭化された形で、二十世紀末から二十一世紀にかけて出現してくることでしょう。そうすると、人間のホモ・ファベル(物を作る人)と、ホモ・

エコノミクス（経済人）の面が顕著になって、ホモ・サピエンス（理性人）が影をひそめてまいります。急速に発展した知識に基づく科学と技術を駆使して生活改善に努めてきた人間が、その激変する環境に自分を適応させるのに苦労するのであります。ドストエフスキーは「人間はどんなことにでも慣れてしまう生物だ」と言っていますけれども、進化の度合いが激しすぎると、環境への適応が難かしくなり、ホモ・サピエンスの面がないがしろにされて、人間はホモ・ファベルだけになってしまいます。ソローの言っているように、人間が「道具の道具」になるのであります。これは極度に発達した物質文明が人間に仕掛ける落とし穴と言えます。

健全な人間世界の実現ということを考えると、現在のように、科学技術の革新によって社会環境が急激に変動し、科学技術それ自身が社会全体のバランスとは関係無く世界をリードしているのは好ましい傾向ではありません。科学技術以外のものでも人間の文化の重要な部分を支えているものが科学技術と並行して発達することが必要であります。つまり、人文科学、社会科学、それに芸術、スポーツといった人間の心と体に重要な関係をもつ部分の発展に努めなければなりません。科学技術がどんなに進歩しようと、社会をリードするのは人間であります。だから、われわれはもって人間と科学技術との関係に注目すべきではないでしょうか。未来に生きるためには科学に対する知識をしっかりと把握することはもちろん必要ですが、同時に、われわれの人間性の向上というこの重要性を忘れることはできません。

同志社を巣立って行かれる卒業生の皆様が知識の練磨と共に心の練磨に励まれ、絶えず人間性の向上を目指して来るべき新しい時代を雄々しく生き抜き、社会のために活躍されんことを心より祈っています。

（同志社女子大学長）